

9 不安や緊張が原因の1つと考えられた 下部尿路症状に対する漢方薬による 治療経験

長崎大学病院 泌尿器科・腎移植外科

松尾 朋博、光成 健輔、大庭 康司郎
宮田 康好、酒井 英樹

【はじめに】

頻尿をはじめとした下部尿路症状の原因はさまざまであるがゆえに、その治療に苦慮する症例も少なくない。また、しばしば他覚所見では異常がないにもかかわらず、既存の西洋薬では症状の軽快を見ない症例に遭遇することもある。『膀胱は心の鏡』と古く中国のことわざにあるように、程度の差こそあれ、「不安」や「緊張」などの精神状態が排尿状態に影響を与えていると推測される患者の中には存在する。

今回われわれは、このような精神状態が影響を与えたと考えられた下部尿路症状を有する患者に対して漢方薬を使用し、症状の軽快を得たので報告する。

【症例1】

31歳男性。不安神経症やうつ病との診断で、心療内科で加療していた。X-3年3月より漠然とした緊張とともに出現する頻尿と尿意切迫感に襲われていた。X年2月、頻尿、尿意切迫感に対する精査および加療目的に当科紹介となった。国際前立腺症状スコア(IPSS)は合計23点、QOLスコア6点、過活動膀胱症状質問票(OABSS)では合計スコアが5点であった。他覚所見では異常なかった。緊張が下部尿路症状に影響を及ぼしていると考えられ、本症例に対し、四逆散(TJ-35、7.5g分3食前)を処方した。処方2か月目頃より、尿意切迫感と頻尿は軽快し、OABSSは合計2点まで低下した。しかしX+1年4月、転職を契機に再度頻尿が出現したため、四逆散を加味帰脾湯(TJ-137、7.5g分3食前)に変更した。その後、症状の軽快を認め、現在も治療継続中である。

【症例2】

65歳女性。12歳まで夜尿症。Y-3年7月より頻発するストーカー被害(本人も含め誰も加害者を見たことはない)を契機に強い不安を抱きだした。同時期に頻尿と尿失禁が出現し、精査加療目的にY年7月、当科紹介受診となった。IPSSの合計スコアは12点で、QOLスコアは6点、OABSSは15点であった。他覚所見は異常所見なかった。前医ですでに抗コリン薬の処方がされていることと、他覚所見は問題ないことから断続的に頻発するストーカー被害による不安が頻尿に関連している可能性があるかと判断し、四逆散(TJ-35、7.5g分3食前)を処方した。ストーカー被害の程度で下部尿路症状に関する漢方薬の効果の程度にばらつきがあるもののおおむね経過良好で、当初1日パッド使用枚数が5枚であったものが2枚へ、IPSSの合計スコアは6点、QOLスコア4点、OABSSの合計スコアは9点までの改善を認めている。

【考察】

不安や緊張が原因の1つと考えられる下部尿路症状に対しては漢方薬が効果を発現する場合もあると思われた。